The Japan Society of Educational Sociology

過剰コード化／過小コード化

～理工系人材養成・学力低下問題の言説研究を事例として～

佐野 秀行
（上智大学大学院文学研究科博士後期課程）

（1）教育社会学におけるコードの理論について

教育社会学の研究においてコードに関する議論はこれまでも理論研究を中心として頻繁に取り上げられてきた。しかしそこで用いられる「コード」や様々な「〇〇コード」といったものは同じ術語で容易にくくることができるものではなさそうである。コードが統辞体系や意味体系を指すのか、受信者の反応を指すのか、あるいはこれらを結びつける（観察者あるいは行為者）の解釈規則や構成的規則についての理論なのか、はたまた二分法などの区分を表現するものなのかは論者によって大きく異なっている。 N. ルーマン等に依拠する研究を若干の例外として、多くの研究は言語理論・記号論のコード概念を借用しているにもかかわらず、である。

無論、こうした用語の同音性は根拠が認められないものではないし、個別の記述において有効である場合も多いために完全に排除すべきものではないが、それがコードの理論についての明晰さを損なったり、議論の混乱を招いたりすることにつながっていることもまた確かなことである。

これまでもコードの理論についての誤解はしばしば指摘されてきた。コードの理論はこれらをふまえ、その理論的背景をも視野にいれながら再検討される余地があるだろう。

(2) 言説研究とコードの理論

U. エーコはコードの理論の対象について次のように述べている。

> もし嘘つきがあるやり方で行動することによって病気であるふりをしたら、この講堂の記号論的な機能は、当人が本当に嘘をついているのかどうかという事実と関係なしに分析できるわけである。嘘をつくことが可能であれば、必ず記号機能が存在する。つまり、現実に対応するものが無いのにあることを意味する（そしてそれを伝達する）ことができるということである。コードの理論は、嘘をつくために利用されうること全てを対象としなければならない

コードの理論のこのような範囲の設定は意味作用の自立性を強調するという点で社会的構築主義の議論を補完するものにもなるだろう。

コードの理論はこれまでイデオロギーや属性に関連付けられることが多く、しばしば安定した構造と混同されがちである。しかし確立されていない規則によってテクストを解釈することを容易に想定しうるように、コードは流動的なものである。

エーコは特にコード化されていない規則を想定してテクスト解釈を限定することを余剰コード化（extra-coding）と呼んだ。また、さらにコードの存在が確定できないときに、潜在的なコードを想定する過小コード化（undercoding）と、既存のコードで解釈できない場合さらに細かい規則を加えることを過剰コード化（overcoding）と呼んでいる。

エーコのこうした二つのコード概念を拡大して言説研究に適用することが本報告の目的である。特に近年盛んに議論されている「学力低下問題」を事例として取り上げることにする。

実態の診断やワラントの提示作業が中心的であるこの問題も、問題の真偽の判定とは独立して、レトリックやその受容の記述についての格好の材料を提供しているからである。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

(3) 事例:学力低下の言説研究

H. ブルーマーによれば、社会問題は「固有の構造をもった一組の客観的な事象ではなく、集合的な定義過程の所産である」とされる。

「学力低下問題」は大学生の理数系学力の問題を1つの契機としている。一連の議論が拡大してゆく過程はドメイン拡張とみなすことが出来る。また、この問題の個々の指摘や議論の変化は、人々によって受容されているところ「学力低下問題」との間に一定のズレをもっていることから、D. スノウらの用語によるならば、マスターフレイムに対するフレーム調整の過程とみなすことが出来る。

スノウの議論はあるクレイムが人々の支持をえるために、より受容されやすい練られた主張(elaborated master frame)を利用し、それはクレイムの創出から衰退まで様々な形で関与するというものである。

本報告では、学力低下問題にこうした視点を後述するコードの議論と比べながら検討し、議論の経過を記述する。その際にはこれまでの議論よりすこし長めにタイムスパンを設定することを提案したい。学力低下問題の契機となった理数系分野からのクレイムは今から10年以上まえから同じ論点を持ちながら、様々な形をとって変奏され続けているからであり、それは今日の議論の前哨戦とも言えるものだからである。

	学力低下	理科離れ	理工系離れ	製造業離れ
2002	28	4		
2001	11	19		
2000	12	3		
1999	9	3		
1998		1		
1997		4	1	
1996	1	1	5	
1995		4	3	
1994		10	3	
1993			1	
1992	2		1	
1991			1	
1990			1	1
1989			2	5
1988				1

【表1 朝日新聞 CD-ROM 版による見出しのカウント】
(記事についても同様の傾向が見られる)

理工系離れや理科離れといった、学力低下問題に先行している議論をここでは便宜上「理工系人材養成の問題」として学力低下問題に対比することする。両者は多くの共通点を持っているが、議論の形成、拡大過程という点では大きく異なっている。前者は漠然とした仮説に依拠しながら、当初の製造業への就職者数、理工系学部進学者、理科教育の問題というように実証面で挑戦されながらも焦点を変えて継続したものである。

こうした問題の形成過程は一種の不正確なコード化、過小コード化の例とみなすことが出来る。反対に後者は既存のコードにさらに細かい解釈規則やワラントを加える議論であり、過剰コード化の例とみなすことができる。

これらを様々な試行錯誤をへて学力低下問題が成立する過程とみなすことも出来るが、理工系人材養成の問題では人々を共鳴させる議論にならなかった、と考えることも出来る。

スノウらはゴフマンにならってフレイムを「過去や現在の環境における対象や状況、出来事や経験、一連の行動を選択的に区切り、コード化することによって世界を単純化する解釈枠組み」と定義している。

これまで社会問題の議論においてその発生・受容過程を説明するレトリックの扱いはコノーテーションが中心であった。しかしレトリックを説得の技法という本来の意味でとらえるとき、何と何がどのように結び付けられて議論が形成されてゆくのかという形式についての議論もまたレトリックの考察に含まれるべきだと言える

引用文献

Blumer,H.1971."Social Problems as Collective Behavior."Social Problems 18: 298-306.

David A. Snow and Robert D. Benford 1992 "Master Frames and Cycles of Protest" in Morris, Aldon D. and Carol McClurg Muller eds. Frontiers in

Hilgartner,S.and C.L.Bosk.1988. "The Rise and Fall of Social Problems: A Public Arena Model."American Journal of Sociology 94: 53-78.

岩田弘三 1999年 「理工系人材養成をめぐる問題 ー理工系離れ、科学技術離れ、理科離れ」『通史 日本の科学技術』第5巻

Social Movement Theory, Yale University Press.

ユーリー.M.ロトマン、磯谷考訳、1998、『文学理論と構造主義』勁草書房。

U. エーコ、池上嘉彦訳、1980 (1976)、『記号論Ⅰ、Ⅱ』、岩波書店。

U. エーコ、谷口勇訳、1996 (1992)、『記号論と言語哲学』国文社。

NII-Electronic Library Service